

比企の畑から・秋

小宮山 洋夫

秋、まだ、ナス、トマト、トウガンなど、夏野菜の姿が見える。地這えキュウリの収穫も続いている。

クズの花の咲くころ種をまいたキャベツ、ブロッコリーは定植されて、葉数をふやしている。

キャベツ畑には、モンシロチョウが、必ず訪れる。それはほっとするのどかな風景である。しか

し、栽培者の脳裏には、すぐさまキャベツ類の葉を食べるモンシロチョウの幼虫、アオムシの姿が映る。すると、せつかくの風景も、アンピバレンツなものに転化してしまう。

涼しい気候を好むハクサイは、秋、成長して、冬に向かつて、球を結ぶ。カブラハバチの幼虫ナ

ノクロムシをはじめ、ハクサイを食卓とする虫は多い。そして、文字通り、ビッシリとつく。

M氏はいう。

「ハクサイは、無農薬では、絶対無理」

そうかなあ、農薬を使つては、何のための家庭菜園かわからない。まあ、ともかく、せつせと、手で虫取りを試みよう。

その結果、半分は結球して、見事な大物ハクサイになった。ダメージの大きかった残りの半分は、半結球にとどまった。これは、ハクサイの一種、半結球のサントウサイと見なし、丸ごと味わった。

秋の菜園のビックイイベントは、何といつても、「サツマイモ掘り」。この大人にとつてもエキサイティングな祝祭には、友人、知人も、何組が参加するようになった。

昨秋、収量はまあまあだったが、表皮が虫（コ

ガネムシの幼虫など）に食われたイモが多かった。水でイモの土を洗い落とすと、あばた面が目立った。味が変わるわけではなく、食害は表面にとどまっているので、騒ぎ立てる被害というほどではない。「はじめてうまいイモを食べた」という感想もとどいた。

だれでも、イモを掘ると、何となく懐かしい思いがこみ上げてこないだろうか。

サツマイモの栽培適地は、サトイモの栽培地、ジャガイモの生産地は、ヤマノイモの栽培地と重なるのだ。稲作以前、



キャベツを食べるアオムシ

サトイモ、ヤマノイモは、日本人の食生活の主役だった。その栽培の起源はあまりに遠く、かすんで分らない。野性のヤマノイモ（自然生）は、いまも、山麓のあちこちに、自生している。日本人は何百年、何千年と、イモを掘りつづけてきた。それで、イモ掘りには懐かしさが伴うのだろうか。

ニンジン、ダイコンの収穫利用が忙しくなる。秋は、これらの根物野菜、サツマイモ、サトイモなどのイモ類、それにカボチャ、葉物野菜をたくさん食べる季節だ。そして、きびしい冬にそなえる。

ミズナの種をまく。この葉の切れ込みが深く、株の分けつのはげしい菜っ葉は、低温に強く、霜に当たっても、葉の一部を枯らすだけ。冬を通じて食べられる。



ハクサイを食べるナノクロムシ

固いアゼ道のあちこちに、モグラが、トンネルの出入口をつくっている。なぜか、やわらかな畑のウネには、あまり見られない。いずれにせよ、彼等はいんな、本能に従って、トンネルを掘っている。トンネルづくりの方法に、それほどの違いはないだろう。

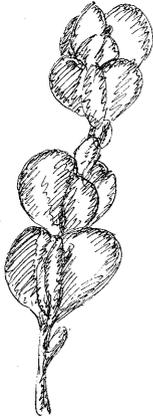
野菜は、太陽、雨、土に恵まれて、育つ。原理は、単純といえば、単純だ。それで、同じ土地で、何年か栽培すれば、その方法は、だれが取り

組んでも、同一のものに、落ちついてもよいはずだ。ところが、実際は、そうはならない。

例えば、雑草、その除去の程度は、栽培者によつて異なる。M氏はかなりていねいにむしる。しゃがんで話をしている間も、視界に入る草をむしっている。多分、無意識に。H氏は徹底的に除草する。彼の畑には、すでに、草があまり生えない。

一方、X氏（この人とは、ほとんど出会ったことがない）のように、雑草の大海の中で、野菜をちらほら、育てている人もいる。

ほとくの畑は、X氏に次いで、草が多い。雑草



ヤマノイモの花(果)穂

は、野菜の根元をおおったり、堆肥づくりの素材として、大切なパートナーとして処遇されている。

方法の違いは、草取りにとどまらない。ウネのつくり方、肥料の種類、与え方など、多方面にわたる。

モグラとちがつて人間は、幸いといおうか、不幸といおうか、本能にそつて、自然とつきあう程度が小さい。自然を解釈し、頭の中で再構成して、それを自然とみなしてつきあう。

野菜畑は、人それぞれの世界観を表現しているようだ。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者